

貿易陶磁の入り口～鴻臚館・博多の様相～

田上 勇一郎（福岡市埋蔵文化財センター）

はじめに

博多湾沿岸地域は中国大陸・朝鮮半島に近いという地理的条件より、古くから対外交流の最前線として繁栄してきた。それは江戸幕府により鎖国政策が開始されるまで続いた。

1. 鴻臚館

「日本書紀」持統天皇2（688）年に初出する「筑紫館」が鴻臚館の前身である。後に「鴻臚館」と名を改め、大宰府の出先施設として、外交使節や外国商人を迎えた迎賓館である。

1987年、平和台野球場外野スタンドの改修工事に伴う調査で鴻臚館の遺構が確認され、それ以降、福岡市により調査が続けられている。調査ではおびただしい数の越州窯系青磁を中心とした貿易陶磁が出土している。特徴的なのは体部外面露胎で胎土に黒斑が多く入る粗製の青磁が多く見られることである（第2図）。その中には重ね焼きの目土が付いたままの物があり、窯から直接運ばれたものと考えられている。福建省の懷安窯産とされるこれらの粗製青磁は北部九州で消費され、日本全国の流通には乗らなかった（鄭・栗・田中 1999）。鴻臚館からは11世紀中頃以降遺物が出土しなくなり、この頃廃絶したと考えられる。

2. 博多

鴻臚館廃絶後、中国の商人は東へ2.5kmの博多に「唐房」「大唐街」というチャイナタウンをつくり貿易拠点とした。そのことを示すのが博多遺跡群である。1977年地下鉄建設に伴う調査で中世の遺構・遺物が良好に残っていることが確認され、現在まで200地点以上が調査された。

（1）出土遺物にみる中世前期博多の特徴

中世前期において博多は国内最大の国際貿易都市であった。そのことを示す考古学的特徴を以下に示す。

貿易陶磁の大量出土

かつて破片数を計測した結果を示すと（池崎 1984）、地下鉄店屋町工区（A・B区）では調査面積644m²で30,279点、地下鉄祇園駅出入口2・3区では440m²で3,794点、4次調査では1100m²で34,302点、10次調査では54m²で801点という数値が示されている。1m²あたりに直すとそれぞれ47.0、8.6、31.2、14.8点であり、他の遺跡とは桁違いの出土量である。

多種多様な陶磁器

耀州窯・連江魁岐窯・黄岩窯・高麗青磁・初期龍泉・同安窯系青磁・磁州窯系陶器・小物など他地域ではあまり見られない多種多様の貿易陶磁が出土している（第3図）。小物については中国商人の生活用品として持ち込まれた物であろう。

陶磁器の分類については大宰府分類（横田・森田 1978・太宰府市教育委員会 2000）が広く使われ、博多においては博多分類（福岡市教育委員会 1984）が使われているが、その分類に収まらない物が多い。

陶磁器大量一括廃棄

破損品や火災にあった数百点もの陶磁器を一括廃棄した遺構がある（第4図）。商品の荷揚げ地や中国商人の住居・店舗・倉庫に比定されている。

墨書き陶磁器

中国産の白磁や青磁の高台内側や、中国産陶器の底部に漢字や花押とみられるものを墨書きしたものがある（第5図）。中国人名と思われる「王」、「柳」、「李」や「（中国人名）+綱」、「綱」などがよ

く見られる。「綱」は中国人商人＝「綱首」のことと思われ、これらは積み荷の所有者をメモ書きしたものと考えられる。花押も同じ役割をしたものであろう。また、数字や「十口内」など、数量を記したものも見られる。これらは中国で荷を積み込むとき、識別として記されたもので、輸入後、墨書きがあるために商品とならずに博多で消費されたと考えられている。

コンテナ容器

中国陶器の大型壺甕類が多数出土する。これらの陶器は陶器そのものではなく、その中に入れられた内容物が商品として輸入されたと考えられ、容器としての壺甕類は博多にとどまったものと思われる。また、博多の井戸側に使用されている結桶についても、国内で結桶が使われるのが14世紀からといわれているので、中国からコンテナ容器としてもたらされたものを転用していると考えられている。一括廃棄遺構で見られた一辺1m四方の木枠も輸入貨物のコンテナ容器の可能性がある（大庭1999）。

寧波系瓦

「花卉文瓦」「押圧波状文瓦」と呼んでいる瓦で、日本の瓦の系譜からはつながりが追えないものがある（6図）。類似の瓦は中国の寧波で見つかっており、最近同型の軒丸瓦も発見された。3D計測や胎土分析の結果から寧波からの輸入品であることが確かめられた。

（2）出土陶磁器からみた貿易の変化

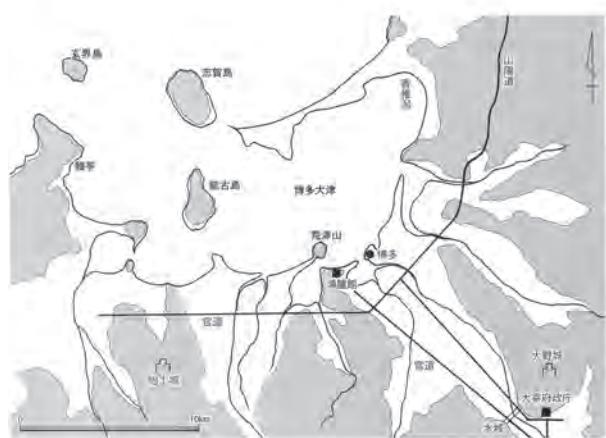
11世紀後半、博多遺跡群から出土する貿易陶磁の量が増大する。この時期、中国からもたらされたのは福建省と広東省で焼かれた白磁が中心である。博多南西部の波打ち際では大量の白磁が集積した状態で発見された（14次）。荷揚げ時に破損した物をまとめて捨てたものと見られている。また、付近では木箱状の中に600個体以上の白磁・陶器が廃棄されていた（56次SK0281）。また、火災にあった品をまとめて廃棄した土坑も発見されている（79次1827号遺構）。このような大量廃棄が見られることから、当時の港や中国商人の居住地はこの付近にあったものと考えられている（大庭2001）。

12世紀後半には龍泉窯系青磁や同安窯系青磁が大量にもたらされるようになる。白磁は広東省産が見られなくなり福建省産のものがほとんどになる。この頃の大量廃棄はやや内陸側に寄っていく（79次2714号遺構・祇園駅2・3号出入口1号土坑）ことから、次第に中国人商人の居住地が広がり、日本人と混住していったと考えられる。（大庭2001）。

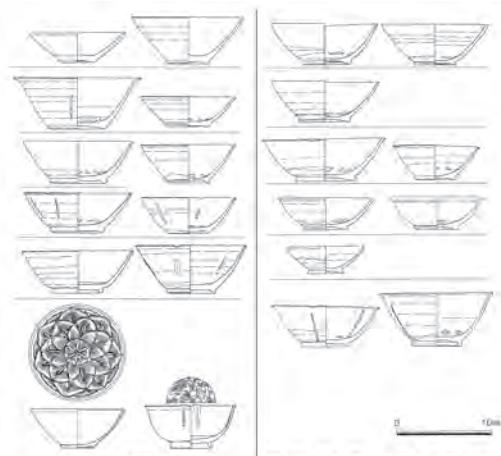
13世紀になると、陶磁器の出土量は減少し、大量廃棄遺構も見られなくなる。また、遺物が多く出土する地点も、前代のような港や中国商人の屋敷があった博多南西部ではなく、東側の聖福寺周辺に集中している。この時期を代表する龍泉窯の蓮弁文青磁碗が全国各地で発見されるのと対照的である。このことから、商品は商人の手元にとどめられることなく、公家や武家、寺社といった権門等、購入者に直接渡ったと見られる。

【引用・参考文献】

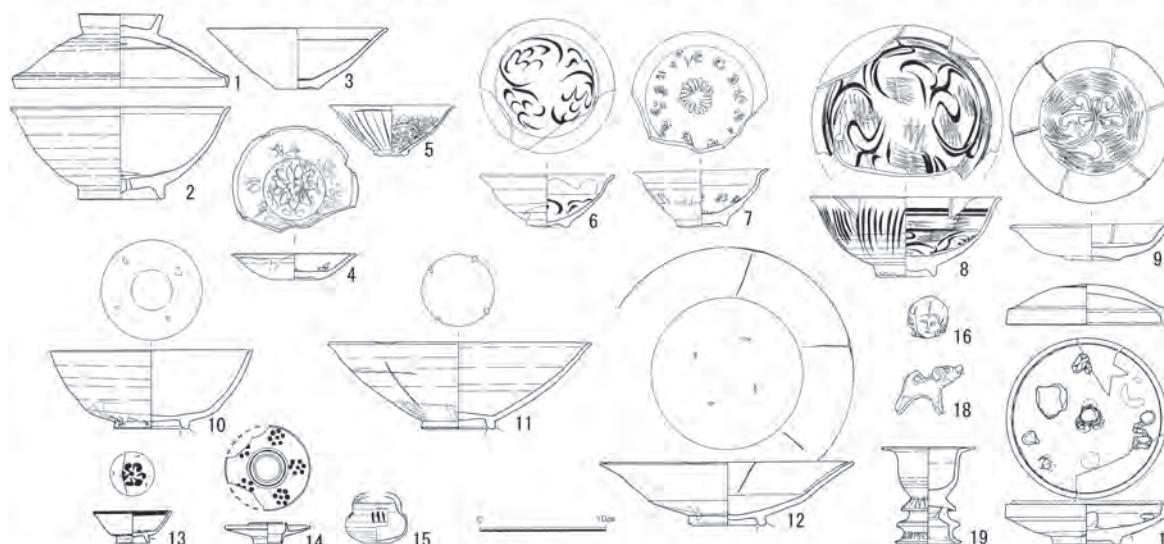
- 池崎譲二 1984 「博多出土貿易陶磁器の組成について」『貿易陶磁研究』NO.4 日本貿易陶磁研究会
大庭康時 1999 「集散地遺跡としての博多」『日本史研究』448 日本史研究会
大庭康時 2001 「博多綱首の時代」『歴史学研究』756 歴史学研究会
亀井明徳 1986 『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎出版
太宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡XV』太宰府市の文化財第49集 太宰府市教育委員会
鄭国珍・栗建安・田中克子 1999 「福州懷安窯貿易陶磁研究」『博多研究会誌』第7号 博多研究会
福岡市教育委員会 1984 「博多出土貿易陶磁分類表」『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV 博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊 福岡市教育委員会
横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館



第1図 古代の博多湾周辺



第2図 越州窯系青磁碗 精製品と粗製品 (1/8)



1~4:高麗青磁 5:耀州窯青磁 6:連江剣岐窯青磁 7:黃岩窯青磁 8・9:初期龍泉・同安窯系青磁 10~15:磁州窯系陶器 16・17:廣東白磁 18・19:景德鎮青白磁
第3図 多種多様な博多出土の陶磁器 (1/6)



第4図 一括大量廃棄土坑 (1/80)



第6図 寧波系瓦 (1/8)